

母親の育児不安に対する育児ネットワークの多様な効果： 支援機能と参照機能の違いに着目して

Diverse Effects of Childcare Networks on Childcare Anxiety of Mothers: Focusing on the Difference between Supportive Functions and Referential Functions

二 見 雪 奈¹⁾
FUTAMI Yukina
荒 牧 草 平²⁾
ARAMAKI Sohei

【要旨】 育児期の母親が形成するパーソナルネットワークに関する先行研究の多くは、主にその支援機能に焦点をあててきた。しかし、マートンの準拠集団論を参考にするなら、育児ネットワークには支援を提供する働き（支援機能）だけでなく、母親が自らの意志でネットワーク構成員を参照し、育児方法の参考にしたり、相手と比較したりする働き（参照機能）もあるのではないかと予想できる。こうした育児ネットワークの多様な機能は、母親の心理状態に対して、肯定的にも否定的にも作用する可能性がある。そこで本稿は、こうした育児ネットワークの多様な機能が、母親の育児不安に与える正負の影響について多角的に検討することを目的に設定した。

首都圏郊外の幼稚園に子どもを通わせる母親を対象とした質問紙調査のデータを用いて、育児ネットワークが母親の育児不安とどう関わるかを検討した結果、以下のような知見を得た。1) 参照ネットワークの規模が大きいほど、また、自分の子育てを育児仲間と比較したり、親から情緒的・情理的支援を受けるほど不安を持ちやすい。2) 一方、支援ネットワークの規模が大きいほど、また、友人や隣人に相談できるほど不安を感じにくい。

以上より、親や育児仲間等との強い紐帯に囲まれて完璧な育児を目指すのではなく、日常の育児と直接には関わらない友人や知人との弱い紐帯を保つことが不安の軽減につながり得る、という実践的インプリケーションが得られる。

1. 育児不安の背景

育児中の親たちは、子どもの笑顔や成長する姿に喜ぶことも多いが、自分の子育てが本当に正しいのかと不安になることも少なくない。たとえば、東京大学とベネッセが乳幼児を持つ家庭を対象に行った調査でも、ほとんどの親が育児を楽しむ気持ちを持つ一方で、子育てへの不安を表明する者も約半数に上るという結果が得られている¹⁾。

子育てに不安を感じる一因は、そもそも、こうすれば必ず上手く行くというような明確な「正解」がないことにあると考えられる。言わば、子育てに失敗はつきものだ。それに関わらず、教育する家族の広がりの中で、多くの母親は、学力も人格も兼ね備えた「パーフェクト・チャイルド」を育てる「パーフェクト・マザー」を志向するようになっている（広田 1999）。そうして社会の要

1) ひばり幼稚園

2) 日本女子大学人間社会学部教育学科

求する「より良い」子育てを追求するあまり、自分は間違った子育てをしているのではないかと不安になっている可能性がある(佐々木 2008)。

一方、育児不安について先導的な研究を行ってきた牧野は、不安の強い母親は、夫の協力が得られなかったり、社会的な人間関係をあまり持っていなかったりする傾向にある一方で、母親自身の属性要因などはあまり関連しないことを明らかにしている(牧野 1982, 1987, 1988 など)。つまり、属性要因などよりも、孤立して子育ての責任を負うという状況が不安と結びつきやすいのだと考えられる。育児期中の核層にあたる 30 代の女性は社会から最も孤立しやすい(稲葉 2013)とすると、その対策を講じることは特に重要だろう。

母親たちが孤立しやすい背景には、社会の近代化とともに、核家族の内外を分ける境界が明確化し、親(主に母親)が単一の育児の担い手となりやすくなった(渡辺 1994)ことも関係している。渡辺によれば、こうした状況においては、育児主体としての母親が、核家族外部の様々な資源をどのようにコーディネートするかが育児環境を大きく規定する。しかも、コーディネーターとしての役割に対する期待が強まれば強まるほど、冒頭に指摘したような親の精神的負担は増加していくと予想できる。つまり、核家族外部と親とのつながりは、育児環境を規定するとともに、育児を担う親の精神的安定にも影響を及ぼすと言える。適切なつながりが形成されずに親の育児不安が強まれば、育児そのものにも悪影響を及ぼしかねないと考え、どのようなつながりが安定した育児環境を整え得るのを明らかにすることが重要な研究課題になってくる。

2. 育児ネットワークの多様な機能

上記のような現状において、育児中の母親たちが形成するインフォーマルな社会的なつながりを育児ネットワークと呼ぶことができる。落合(1989)によれば、現代の特に都市部では、同年齢層の子どもを持つ母親同士が自発的かつ自然発生的に生み出した地域の育児ネットワークが重要な役割を果たしている。

では、育児ネットワークは、母親の育児に対して、具体的にどのような働きをするのだろうか。先行研究が主に着目してきたのは、育児ネットワークが母親たちの育児を支援する機能であった(落合 1989; 関井ほか 1991; 久保 2001; 前田 2004, 2008; 松田 2001, 2008; 星 2011, 2012)。幼い子どもの育児には手間もかかり親の不安も大きいこと、また、孤立している親ほど不安を感じやすいこと(牧野 1982, 1987, 1988)などをふまえれば、ネットワークの支援機能に関心が向かうのは当然だろう。

ここで注意が必要なのは、支援機能と一口に言っても、その内容は多様であるということだ。一般的には、子どもの世話などの「手段的支援」と、悩みや愚痴の聞き役となるなどの「情緒的支援」を区別して取り上げることが多く、さらに子育てに必要な情報の提供などを意味する「情報的支援」や、金銭的な援助などの「経済的支援」を考慮することもある(落合 1989; 関井ほか 1991; 久保 2001; 前田 2008; 松田 2001, 2008; 星 2011, 2012; 荒牧 2019)。また、手段的支援や経済的支援はほぼ親族に限られる一方で、情緒的支援や情報的支援は非親族から得られやすいことも知られている(落合 1989; 関井ほか 1991; 久保 2001; 星 2011, 2012; 荒牧 2019)。したがって、特に都市部の母親が自発的・選択的に形成した、インフォーマルな育児ネットワーク(落合 1989)の支援機能に着目する場合、特に、ネットワークの情緒的および情報的支援機能を解明することが重要に

なる。

ところで、育児ネットワークは、いつでも母親を支援する機能だけを持つものだろうか。たとえば松田 (2001, 2008) は、支援ネットワークに占める親族割合やネットワーク密度が高すぎると育児不安がかえって上昇することを明らかにしている。前田 (2004) も、母親役割に対する社会通念的規範が、特に「育児仲間によって構成されるネットワーク」を通じて母親のストレーンを高め得ると指摘する。また、育児ネットワークに限らず、一般に社会ネットワークがストレス要因となり得ること (目黒 1988) や、心理面に負の効果を持ち得ること (石田 2006) も以前から問題視されてきた。

こうした問題意識と関連する研究として金 (2007) がある。金は、幼児を育てる 4 人の母親を対象に詳細な聞き取り調査を行い、育児ネットワークが母親の意識や行動に与える影響を多角的に検討している。その結果、育児ネットワークには支援機能のほかに、「規範機能」と「比較機能」も存在することを析出するとともに、それらが母親の心理状態に対して負の効果を持ち得ることを指摘した。ここで「規範機能」とは、母親の立場からすれば、ネットワーク構成員からの規範的期待に沿うように同調を強要されることを、「比較機能」とは、ネットワーク構成員の意見や育児行動との比較を通じて、母親が自身の育児の位置づけを確認・評価することを指す。

こうした金 (2007) の知見は、社会学で古くから着目されてきた、準拠集団 (Merton 1957 = 1961) の概念を用いるとよく理解できる。すなわち、育児ネットワークは母親にとっての準拠集団を形成しており、その構成員である親族や育児仲間などの言動を参照して自らの育児態度を形成したり (規範機能)、彼女らとの比較から自分の育児を評価したり (比較機能) していると考えることができる。なお、金の想定した規範機能は、構成員から同調を強要される側面に限定されていたが、準拠集団の理論に照らすなら、規範機能にはego自身が主体的に構成員の言動を参照する面も含めてよいだろう。いずれにせよ、これらの知見をふまえれば、育児ネットワークは支援機能だけでなく、「参照機能」も持ち得ると想定できる。ただし、金は 4 人の事例から仮説的に規範機能と比較機能について言及したに留まるため、金自身が今後の課題としていたように、量的調査によって知見の信頼性を再検討することは有益だろう。

以上をふまえて、本稿では、従来から注目されてきた育児ネットワークの支援機能 (相談・情報) に参照機能 (規範・比較) も加えた 4 つの働きに着目し、それらが育児不安に対してどのような作用をもたらすのかを量的調査のデータから検討したい。

3. 研究課題と研究方法

3.1. 分析枠組とリサーチエクステンション

育児ネットワークが育児不安などの心理的側面に及ぼす影響を把握する際には、その規模・構成・密度などの構造特性、および接触頻度・住居の近さ・親密さなどの紐帯の質に着目するアプローチが採用されてきた (松田 2001, 2008; 前田 2004; 星 2012)。ここで、前者の構造特性のうち、規模は構成員の人数によって測定するのが通例であるが、構成や密度の測定方法は必ずしも定まっていない。

ネットワーク構成の指標としては、学校の友人・仕事仲間・育児仲間・親族など特定の続柄が構成員全体に占める割合に着目する場合 (松田 2001, 2008; 前田 2004; 星 2012) もあれば、単純に

各統柄の者が含まれるか否かに着目する方法(星 2012)もある。本稿では、規範機能や比較機能という研究蓄積の少ない側面に着目するため、まずは基本的な情報として各統柄の者が含まれるか否かを把握し、より複雑な効果については探索的に検討してみたい。

以上に加えて、ネットワークの密度や紐帯の質についても知ることができれば、ネットワークの詳細な機能を把握する上で有益であることは間違いない。ただし、どちらを測定する場合にも、個々の構成員を特定したネームジェネレーター方式の調査デザインが不可欠であり、その場合に把握可能な構成員の数はせいぜい4人程度に留まってしまうという限界がある。一般に、ネットワーク規模はそれ以上であることが多いので、この調査方法では、ネットワークのごく一部しか把握できないことになってしまう²⁾³⁾。したがって、ネームジェネレーター方式を用いて少ない人数から詳細な情報を得るのか、それとも全体像の把握を重視するのかは基本的にはトレードオフの関係にあり、研究目的に合わせてどちらかを選択することが求められる。本稿は、研究蓄積の少ない参照機能に注目しているため、まずは全体に関する基本的な情報として規模と構成を把握することが先決であると考え、今回は密度や紐帯の質の測定は断念した。

次にネットワークの多様な機能をどう把握するのかについて考えたい。この点については、松田(2001)のように、社会的ネットワークは、手段・情緒・情報といった複数の機能を統合した支援の集合形だとみなす立場もある。しかし、ネットワーク構成にも着目することによって、たとえば、手段的支援を受けるのは主に自分の親を中心とした親族である一方、具体的な育児のあり方について情報を得たり、互いに比較したりするのは同年代の育児仲間だというように、目的に応じてネットワーク資源を使い分ける側面に照射することも可能となる。特に本稿のように、支援機能だけでなく参照機能も考慮する場合、目的による使い分けはより明確になされるのではないかと予想される。

なお、「目的に応じた使い分け」とは、上記の例のように個々の「目的」に応じて関わる「相手」を選ぶこと、あるいは「相手」によって「関わり方」を選択することを指す。また、「ネットワークの機能」とは、個々の「関わり方」を区分する概念になる。これに関連してウェルマンとウォートレー(Wellman and Wortley 1990)は、どのタイプの支援を受けるかは、ネットワーク構成員との統柄に依存するのであって、相手のSESなどの個人的特質はほぼ関連しないことを明らかにしている⁴⁾。これを参考にして、本稿でも相手の統柄によるネットワーク機能の使い分けに着目するアプローチを採用したい。

最後に、育児不安の把握方法について検討しよう。従来の研究は、主に不安やストレーンの程度にネットワークがどのように関与するかを問題にしてきた(松田 2001; 前田 2004; 星 2012)。確かにこれは非常に重要な研究課題だと言える。しかし、ネットワークの及ぼす影響は不安の種類によっても異なる可能性がある。たとえば、育児に関する情報不足や周囲からの孤立によって不安を感じている場合には、支援ネットワークの充実によって不安は和らげられるかもしれないが、完璧な育児を目指して不安になっている場合には、周囲との比較がかえって不安を増幅させる可能性もある。そこで本稿では、不安の程度だけでなく不安の種類も取り上げ、ネットワークの効果の違いを検討してみたい。

以上をふまえ、次の2つのリサーチクエスション(RQ)を設定した。

RQ1. 母親たちは育児ネットワークをどのように使い分けているか

RQ2. 各ネットワークの規模や構成は不安度や不安の種類とどう関連するか

RQ1 では、従来から注目されてきた育児ネットワークの支援機能に加えて参照機能（規範機能と比較機能）にも目を向けつつ、それぞれの目的に応じて関わる相手をどのように使い分けているかを検討する。

RQ2 に関連して、松田（2001, 2008）は、支援ネットワーク規模が大きいほど不安は軽減されることを明らかにしているが、金（2007）の知見からは、参照ネットワークの規模が大きい場合には、むしろ不安は大きくなることも予想される。他方、それぞれのネットワーク構成が不安とどのように関連するのかや、不安の種類によるネットワークの効果の違いについては明確に予測を立てることが難しい。したがって、これらについては探索的に検討することとしたい。

3.2. データ

上記の課題を解明するため、二見が教育実習を行った首都圏郊外の私立幼稚園に依頼し、園児の母親を対象として質問紙調査を実施させて頂いた。この幼稚園は、以下のいくつかの理由から上記の問題を考察する上で適していると考えられる。第1に、都市郊外は、自然発生的な育児ネットワーク（落合 1989）が活発であることや、松田（2008）の主な知見も都市郊外の調査で得られていることから、本研究の対象地域としても適当だと判断できる。また、この幼稚園は徒歩通園のみを採用しているため、対象となった母親同士は容易に行き来できる範囲内に居住しており、ネットワーク形成もその維持も容易だと考えられる。さらに、対象園は一戸建てが建ち並ぶ住宅地に位置するが、上記の通り、対象者たちはこの地域内に住んでいるため、生活水準の同質性も比較的高いと予想される。以上のことから、今回の調査対象となった母親たちは、育児仲間との交際が活発であると期待できる。本稿は、このような1つの典型例から、ネットワークの多様な機能を探索的に解明しようとするものである。

実査は対象園を利用する母親全員を対象として2018年11月に行った。依頼文書と調査票の配布および回答済み調査票の回収は対象園に依頼し、回収票は二見が後日受け取りにうかがった。全園児210名分を配布したうち184部が回収されているので、配布数に対する回収数の割合は87.6%になる。ただし、きょうだいで対象園を利用する家庭もあるため、対象者ベースの回収率は約95%と推計される⁵⁾。

3.3. 主な変数の構成

ネットワーク規模：「あなたが育児で困っていることがあった時に、相談に乗ってもらっている方（相談）」「あなたが育児に関する情報を得ている方（情報）」「あなたが自分の子育ての手本としたり、参考としている方（規範）」「あなたが自分の子育てと照らし合わせて、比較している方（比較）」それぞれの人数。「全くいない」「1～3人」「4～9人」「10人以上」という選択肢を設定し回答してもらった。

ネットワーク構成：上記の4つのネットワークそれぞれについて、「自分の親」「配偶者の親」「その他の親族」「育児仲間⁶⁾」「その他の友人」「その他の近隣の方」のうち、どの続柄の者が含まれ

るか。

育児不安の程度（不安度）：「あなたはどれくらいの頻度で育児に不安を感じますか」という設問への回答。「常に感じている」「時々感じている」「ほとんど感じない」「全く感じない」という選択肢を用いた。

育児不安の種類：「育児に関する情報が不足しているとき（情報不安）」「周囲に育児仲間があまりいないと感じたとき（孤立不安）」「完璧な育児を求めすぎているとき（完璧不安）」のそれぞれについて不安を感じるか否か（2値変数）。

4. 育児不安に対するネットワークの効果

4.1. 多様なネットワークの利用

初めに表1より各ネットワークの規模を確認しよう。まず目につくのは、支援ネットワークの規模が大きく、全体の6～7割強が少なくとも4人以上であること、中でも情報ネットワークの場合は「10人以上」も3割を超えることである。ここから、子育ての情報や悩みについて様々な人々から支援を受けている母親が多いと言ってよいだろう。従来の研究がネットワークの支援機能に着目してきたのも頷ける。

一方、参照ネットワークでは逆に3人以下が6～7割に達しており、全く「いない」者も少なくない。つまり支援ネットワークに比べて参照ネットワークの規模は明らかに小さい。しかし、規範ネットワークで「いない」という回答が1割程度ということは、逆にほとんどの者が少なくとも誰か1人を参照しているとも言える。また、4人以上も3割前後いることを考えると、育児ネットワークの参照機能についても調べることは有益だと判断できる。

表1 各ネットワークの規模 (%)

		いない	1～3人	4～9人	10人以上	計
支援ネットワーク	相談	4.9	35.3	47.3	12.5	100.0
	情報	8.2	17.4	43.5	31.0	100.1
参照ネットワーク	規範	13.0	50.5	25.5	10.9	99.9
	比較	35.3	36.4	19.6	8.7	100.0

注) N=184.

表2 各ネットワークの構成 (%)

		自分の親	夫の親	他の親族	育児仲間	友人	近隣
支援ネットワーク	相談	79.3	38.6	33.2	81.0	50.5	13.6
	情報	61.4	33.7	34.2	84.8	60.9	20.7
参照ネットワーク	規範	64.7	35.9	23.9	55.4	40.8	10.3
	比較	32.1	18.5	16.8	47.8	24.5	6.5

注) それぞれを含むと回答した割合(複数回答). N=184.

以上のように各ネットワークの規模が異なることから、母親たちは目的に応じて関わる相手を使い分けていることが示唆される。そこで各ネットワークの構成を確認すると、表2の通り、全体に自分の親や育児仲間が選ばれやすい点は共通しているが、ネットワークの種類によって構成

比率に特徴のあることも見て取れる。すなわち、支援ネットワークにおいては、相談面では自分の親を、情報面では友人や隣人を、より選択しやすい傾向にある。また、参照ネットワークの場合、最も手本にされやすいのは自分の親だが、比較相手としては育児仲間の方が選ばれやすくなっている。

4.2. ネットワークと不安の多様な関連

前節の基礎的な集計から、母親たちが目的に応じて関わる相手を使い分けている様子がうかがえた。では、こうした違いは不安度や不安の種類とはどう関係するのだろうか。

このような多変量の関連をとらえる場合、一般的には回帰系の多変量解析を用いることが多い。十分な研究蓄積に基づき、単一の従属変数に対する様々な独立変数の効果を比較検討する、仮説検証型の研究であれば、こうした手法は大きな威力を発揮する。しかし、本稿は育児不安に対するネットワークの多様な機能という未開拓の研究テーマに取り組んでおり、また、「従属変数」にあたる複数の不安指標同士の関連も分析の射程に入っている。加えて、ネットワーク属性は相互に関連が強いため、回帰系の分析手法では多重共線性の問題が生じる恐れもある。したがって本稿では、多次元の関連性を探索的に分析することに適した、多重対応分析 (MCA) を適用することとした。

図1は、各ネットワークの規模と構成、不安度と不安の種類 (情報不安・孤立不安・完璧不安の3項目) に加え、育児負担に関わる属性変数として、子ども数、3歳未満の乳幼児の有無、親との同居の有無、就業の有無⁷⁾を含めた合計18変数 (37カテゴリ) に対してMCAを適用した結果になる。なお、ネットワーク構成は第3節に記載した方法で調査したため、合計で24変数になるが、本稿の目的はこれらが不安とどう関連するかを解明することにあるため、MCA空間の作図には、不安指標との間に統計的に有意な関連の認められた6変数 (比較ネットワークにおける親と育児仲間、2つの支援ネットワークにおける親と友人) のみを用いた⁸⁾。以上の変数による分析の結果、全分散 (修正イナーシャ) への寄与率は、第1軸で56.8%、第2軸で10.2%であった⁹⁾。つまり、全体の約3分の2がこの図1に表現されていることになる。

第1軸 (縦軸) は、上半分にはネットワーク規模が大きく (▲印)、各統柄の構成員が含まれる (●印) という回答が、下半分にはその反対に規模が小さく (△印)、各構成員が含まれない (○印) とする回答が集まっていることから、ネットワーク規模の大小をとらえた軸とみなせる。一方、第2軸 (横軸) は、右側には不安度が低いあるいは不安が無い (◇印) とする回答が、左側には不安度が高いあるいは不安がある (◆印) という回答が集まっており、不安の大小をとらえた軸とみなせる。なお、第2軸の右側には、支援ネットワークの規模が大きく (▲印)、参照ネットワークは小さい (△印) という回答が集まっており、左側ではその反対の傾向が認められることから、第2軸はネットワーク構成の違いをとらえた軸ともみなせるだろう。

このように、第1軸をネットワーク資源の多寡 (資本の総量)、第2軸をその構成 (資本の構成) ととらえると、図1のMCA空間の基本構造は、ブルデュー (Bourdieu 1979 = 1990) の描いた社会空間の構造と類似している。あるいは育児界の資本構造をとらえたものと言えるかもしれない。なお、ブルデューの社会空間においては文化資本と経済資本の多寡が斜めに交差して現れたが、ここではネットワークの正負の効果が斜めに交差して浮かび上がっている。

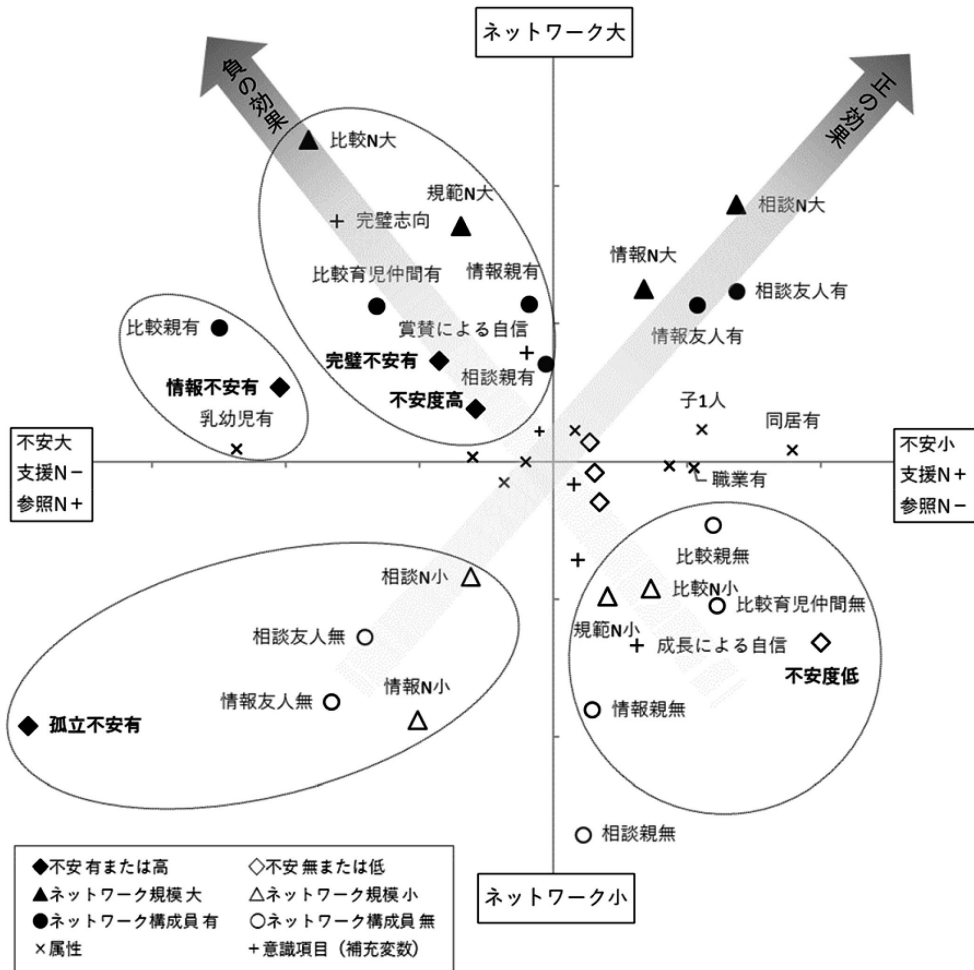


図1 多重対応分析の結果

以下、各不安指標の位置(◆印と◇印)に着目しながら結果を詳細に見てみよう。まず、左上の第2象限には「不安度高」と「完璧不安有」が位置しており、その他には2つの参照ネットワークの規模が大きいこと、比較ネットワークに育児仲間を含むこと、情報・情緒支援ネットワークに親を含むことが位置づいている。他方、その対極にある第4象限には、ほぼそれと反対の状況が見て取れる。このことから、第4象限から第2象限に向けてネットワークの負の効果がとらえられていると見なせるだろう。以上の結果は、参照ネットワークの負の効果という金(2007)の指摘に対応するとともに、参照ネットワークに親や育児仲間が含まれると不安が強まりやすいという新たな知見ももたらしてくれる。なお、第2象限には「情報不安有」も位置しており、その近くには親と比較することや乳幼児を持つことが集まっている。乳幼児がいると、どう育てたらいかがかわからず(そこで親と比較すると時代による情報の違いもあり)、情報不安に陥りやすいということかもしれない。

他方、第1象限と第3象限には、上記とは異なる関連構造を見いだすことができる。左下の第3象限には、「孤立不安有」とともに、支援ネットワークの規模が小さく、そこに友人を含まないことが位置づいている。一方、第1象限にはそれと反対の状況が見て取れるので、友人に相談できたり友人から育児情報を得られれば、孤立感から生じる不安を回避しやすいということだろう。先ほどとは反対に、ここにはネットワークの正の効果がとらえられていると見なせる。以上の結果は、支援ネットワーク規模が大きいほど不安が弱められるという松田(2001, 2008)の知見と一致するとともに、特に友人からの情緒的・情動的支援が有効であることを示している。

上述の構造は子育てに関する意識とも関連している。図1には、いつ子育てに自信を感じるかという質問に対して、「子どもが周囲の人々から褒められたとき(賞賛による自信)」「子どもの成長を感じたとき(成長による自信)」と回答した結果、および完璧な母親を目指す傾向(完璧志向)の有無を補充変数として追加的にプロットしている(+印)¹⁰⁾。ここから上記の解釈と整合する次の2点が指摘できる。1) わが子が周囲から賞賛されたときに自信を感じるという回答と完璧志向は、比較ネットワークの利用が活発で完璧不安を持つ者の多い第2象限に位置する。他者の子育てと比較し完璧を目指す傾向が不安と結びつく様子が見て取れる。2) これに対し、他者との比較ではなく、子どもの成長を自ら感じたときに自信を感じるという回答は、比較を重視せず不安度の低い第4象限に位置する。

ここで属性変数の位置を確認しておく、親との同居、子どもが1人であること、有職であることが第2軸の右側に位置していることから、これらの属性を持つ者は相対的に不安を感じにくいことがわかる。

ところで、MCAを適用した研究例は必ずしも一般的ではないため、別の分析手法を用いて上記の知見を再確認しておくことも有益だろう。ここでは正負のネットワーク効果をとらえる指標を作成し、不安指標との関連を確認してみたい。図1より、正の効果は2つの支援ネットワークの規模と友人がそれらに含まれることによって、負の効果は2つの参照ネットワークの規模、および育児仲間が比較ネットワークに、親が支援ネットワークにそれぞれ含まれることによってとらえればよいだろう。これらの変数群毎に抽出した主成分得点を各ネットワーク効果の指標とし¹¹⁾、不安指標との相関係数を算出した。結果は表3に示した通りで、正の効果は孤立不安に負の関連を、負の効果は不安度と完璧不安に正の関連を持っており、MCAの知見と整合的であることがわかる。

表3 正負のネットワーク効果と不安指標の相関

	不安度	完璧不安	孤立不安
正のネットワーク効果	0.10	0.06	-0.20**
負のネットワーク効果	0.20**	0.15*	-0.09

注) * $p<.05$ ** $p<.01$.

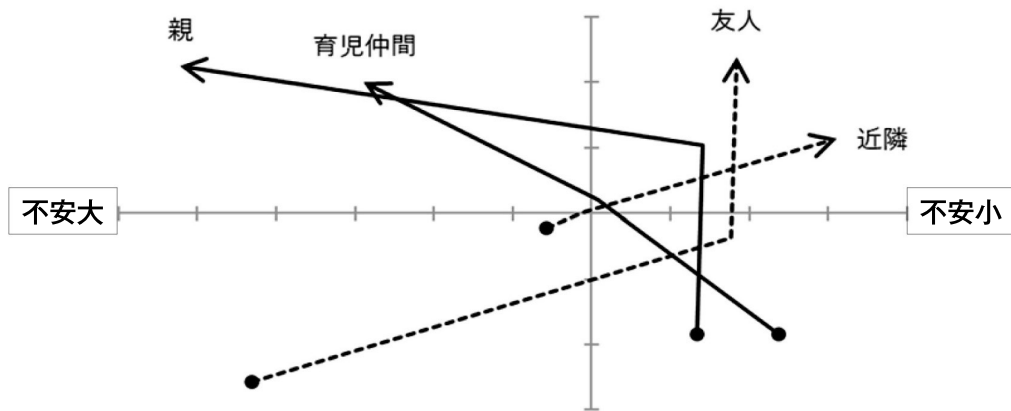


図2 各統柄を含む割合の増加に伴う軌跡
注) 図1と同じMCA空間への補充プロット。

さらに別の角度からも以上の結果を再検討してみよう。第3節で見たように、ネットワーク構成は松田(2001)や前田(2004)のように各統柄の含まれる割合からも把握できる。そこで、図1と同じMCA空間上に、各統柄を含む割合の増加に伴う軌跡をプロットしてみた(図2)¹²⁾。ここから、育児仲間と親の場合は、ネットワーク全体にそれらを含む割合が高くなるほど第4象限から第2象限へと移動し、友人と近隣の場合は第3象限から第1象限へと移動することがわかる¹³⁾。つまり、親と育児仲間を含む割合が高い者ほど不安が大きいのに対し、友人と近隣を含む割合が高い者ほど不安が小さいのである。なお、親の場合、第1象限を経由してから第2象限に至るという結果は、親族割合が中程度の場合は不安度が低く、それが高すぎると不安度も高くなるという松田(2001, 2008)の知見に対応する。また、友人の場合は、ネットワーク内にある程度含まれることによって不安が和らげられる(第2軸に沿って左から右へ移動する)が、それ以上に高い割合であっても不安感には影響しないこともわかる。

5. 考察

5.1. 主な結果と課題

本稿では、幼稚園児の母親を対象とした質問紙調査の結果に基づいて、育児ネットワークの多様な機能がどのように使い分けられているか(RQ1)や、それらが不安度や不安の種類とどう関連するのか(RQ2)を検討した。

RQ1に関しては、従来の研究が着目してきた支援機能だけでなく、相手を手本としたり相手と比較したりする参照機能の存在が改めて確認されるとともに、母親たちが目的に応じて関わる相手を使い分けしていると見なせる結果が得られた。

RQ2に関して何より興味深いのは、金(2007)も指摘した参照ネットワークの負の効果が確認されたこと、および、それが完璧な育児を目指すことからくる不安や、育児仲間との比較と強く関連すると示されたことである。しかも、子育てに自信を感じる時や完璧志向といった意識項目との関連も、上記の解釈と整合的に理解可能であった。もちろん、これらの結果から因果関係を

特定できるわけではないが、ネットワークに占める育児仲間の割合が高い者ほど不安が大きいこと（図2）からしても、育児仲間との交際が活発化すると、彼女らとの比較によって完璧な育児を行う完璧な母親にならなければならないかと思いつめてしまい、不安も強まるのではないかと想像できる。前田（2004）は育児仲間によって構成されるネットワークではストレーンが高くなると報告しているが、それは特に相手と比較し競い合いながら完璧な育児を目指す傾向と関連する可能性がある。

ちなみに、小中学生の保護者を対象に行った調査データの分析においては、子どもに高学歴を強く求める親は、幸福感や社会一般に対する信頼感が低かったり（荒牧 2020）、学校や教師に対する不信感が強かったりする（荒牧 2009）という知見も報告されている。仮に、相手と比較し競い合う育児をする親たちが、やがて子どもに高学歴を求めるようになるのだとすると、現在の育児に対する不安感が、社会に対する信頼感や幸福感の欠如へとつながっていくのではないかと予想することができる。

ところで、RQ2に関しては、親による情緒的・情動的支援が不安と関連するという興味深い結果も得られた。一般に、親からの支援はメリットをもたらすと考えられていることからすると、これは理解し難い結果にも思える。この謎を解く鍵は、親による支援の効果がネットワークに占める親割合の高さによって異なること（図2）にあると考えられる。親割合の高い状況とは、裏を返せば、親以外とのつながりが少ないことを示唆する。そうした場合、情報源としても相談相手や参照相手としても親を選択することになりやすい。このように親以外に頼る者が少ないと、親による干渉が強くなったり、視野が狭くなったりして、不安も感じやすくなるのではないかと解釈できる。もちろん、不安の強い者が自分の親だけに頼るという逆の因果関係も考えられなくはない。しかし、その解釈が正しいとすると、親だけに頼っても不安は解消しないことを上記の結果は意味している。もちろん、親との同居が第2軸の右側に位置することから、同居によって家事や子どもの世話などを親に頼めること（親による手段的支援）は育児不安を弱める効果があると解釈できるものの、情緒面や情報面で親への依存度が高い状況は、かえって不安を強める可能性もあるという複雑な関連を、MCAの結果は示している。

最後に注意が必要なのは、上記の知見が、都市郊外にある1つの幼稚園への調査のみに基づくということだ。もちろん、ほぼ全員から回答を得られていることや、先行研究の様々な知見と整合することから、本稿の知見にも一定の信頼性はあると判断できるが、松田（2008）や前田（2004, 2008）の研究からも、都市郊外以外の地域では、ネットワークの機能が今回の結果とは異なる可能性も十分に予想される。また、本稿では、egoが構成員を意図的に選択して関わる側面を強調したが、構成員の言動が情報環境を形成することによって、意図せずして影響を及ぼす面もあるだろう¹⁴⁾。他にも、参照機能の概念やその測定方法の精緻化も必要になるだろうし、父親（夫）の役割を考慮することも今後の重要な課題である。また、先行研究では不安との強い関連が見出されなかったとはいえ、社会階層などの属性要因の影響も改めて確認しておく方がいいだろう。このように様々な限界や課題はあるが、育児ネットワークの持つ多様な機能について、特に従来はあまり検討されてこなかった参照機能の効果について、調査データから整合的に理解可能な知見を得られたことには大きな意義があるものと考えられる。

5.2. 理論的・実践的インプリケーション

渡辺(1994)が指摘したように、現代の育児構造においては、コーディネイターとしての母親がネットワークをどのように利用するかが、育児環境や母親自身の心理状態と密接に結びつくことになる。こうした状況に対し、従来の研究は、つながりや支援が多いほど心理的安寧を得られやすいとして、ネットワークの正の効果を強調する傾向にあった。しかしながら、本稿で確認したように、参照ネットワークの規模が大きい場合には、むしろ不安を感じやすくなる恐れがある。また、親への依存や育児仲間との競争を背景に完璧な育児を目指す傾向が、こうした不安と繋がっている様相も垣間見えた。

これは、弱い紐帯に関するグラノヴェッター(Granovetter 1973 = 2006)の議論をふまえると、次のように解釈することもできる。一緒に過ごす時間や情緒的なつながり、相互の助け合いなどが紐帯の強さに関わるというグラノヴェッターの定義から、親や育児仲間は相対的に強い紐帯であり、友人と近隣はどちらかという弱い紐帯であるケースが多いと思われる。仮にこの見方が正しいとすれば、強い紐帯である前者は相対的に閉じた密度の高いネットワーク(クリーク)となりやすく、支援も与えてくれる反面、育児のあり方などにも踏み込んだ参照機能の働くことが多くなる。そのため、特に育児のあり方に関わる完璧不安とも関連しやすかったのではないだろうか。他方、友人や近隣との紐帯は弱い傾向にある、つまり、それらの構成員は別々のネットワーク(クリーク)に所属している可能性が高い。そのため、彼女らとの交流によって日常の育児から一旦離れ、広い視野から自らを振り返ることができる、心理的安寧も得られやすいのではないかと推測できる。松田(2008)の整理したように、従来、強い紐帯は情緒面(ソーシャル・サポート仮説)で、弱い紐帯は情報面や手段面(社会的資源仮説)で力を発揮すると理解されてきた。しかし、不安の種類と参照機能に着目した本稿の知見は、上記の理解は必ずしも普遍的には妥当せず、育児期の母親においては、完璧志向を共有した強い紐帯が心理面でかえって負の効果を持ち得る一方で、弱い紐帯が有効な情緒的支援を提供し得ることを示唆している。

以上をふまえると、親や育児仲間を中心とした強い紐帯に囲まれて互いに競い合いながら完璧な育児を目指すのではなく、少し離れた位置から冷静に助言を与えたり相談にのったりしてくれる育児仲間以外の友人・知人と弱い紐帯を保ち、時には日常の育児から心理的に距離を取ることによって、不安の軽減につながり得る、というのが本稿の実践的インプリケーションになる。もちろん、その実現には様々な困難も予想されるが、こうした方向での支援は幼稚園や保育所を含めた公的機関によっても担い得る¹⁵⁾と考えると、その関わりも含めた育児ネットワーク研究の充実が今後はより重要になってくるように思われる。

付記

本稿は、二見雪奈が本学教育学科に提出した2018年度卒業論文を改訂したものである。教育実習を受け入れて下さった上に、調査にご協力下さった回答者の皆様に幼稚園の関係者の皆様に、また、データの再利用を認めて下さったことに心より感謝申し上げます。

注

- 1) 「楽しい」「充実している」などの回答が9割を超える一方で、「子どもがうまく育っているか不安になる」と回答した母親は0～1歳児期が52.1%、1～2歳児期は53.1%となっている(東京大学大学院教育学研究科附属発達保育実践政策学センター(Cedep)・ベネッセ教育総合研究所2018)。
- 2) 松田(2001)は、密度や構成の測定には4人までのネームジェネレーター方式による回答の情報を用い、規模については別にたずねる方法を採用している。これも1つの解決方法だと言える。ただし、松田の調査では全体の67.3%が5人以上のネットワークを持つにもかかわらず、密度や構成の測定には5人目以降の構成員の状況が反映されないという限界を持つ。
- 3) ネームジェネレーター方式によるデータを用いて、ネットワーク密度などの構造特性を測定することに対しては、先の注(2)で指摘した「研究対象の範囲」という問題に加え、「異質な紐帯の混在」と「認知と実際の混在」という別の2つの問題点も指摘されている(安田2011)。
- 4) 支援のあり方に影響する唯一の例外的な個人的特質は性別であり、情緒的支援は女性との間に多いことが明らかにされている(Wellman and Wortley 1990)。
- 5) 回収した184票のうち、幼稚園児が2人いる家庭が14ケース、3人いる家庭は1ケースなので、実際に調査対象となった母親の数は194(=210-14-2)名、その場合の回収率は94.8%と推計できる(未回収の家庭にもきょうだいで通うケースがあった場合、回収率はさらに高いことになる)。
- 6) 育児仲間については「同じ幼稚園または保育園」「同じ習い事」「同じ職場」のうち該当するものを選択してもらったが、習い事や職場を選んだ者は少なかったこともあり、すべてを統合して「育児仲間」とした。
- 7) 属性変数については、子ども数のみ「1人(16%)」「2人(60%)」「3人以上(24%)」の3値とし、その他は2値とした。ちなみに、3歳未満の乳幼児「有」が27%、親との同居「有」が10%、就業「有」が36%であった。
- 8) 不安指標と関連しない18変数も含めて分析を行うと、その数が多いこともあり、不安とは別の側面における変数間の関連性を反映した結果となり、本稿の関心にとっては意味のないものになってしまう。
- 9) ちなみに、第3軸の寄与率は3.8%に留まることから、第2軸までに着目することが特に重要だと判断できる。
- 10) 補充変数とは、MCAによる空間構成には用いられない変数で、事後的に空間上に配置されたものになる。MCAでは変数カテゴリーと対象者個人の位置が同時に算出されるため、このように事後的にプロットすることが可能となる。
- 11) 正負いずれの効果についても、第1主成分の固有値が2を超え、それらの寄与率は正の効果(4項目)では51.1%、負の効果(5項目)では40.4%であった。
- 12) 4種のネットワークに各統柄が含まれるか否かを基に算出し、それぞれの分布が3等分に最も近くなるようにリコードして用いた。
- 13) 図が煩雑になるため省略したが、「夫親」と「その他の親族」も、育児仲間や親と似たような経路をたどる。ただし動きはより小さい(原点に近い)。
- 14) 周囲の者が似通った考え方を持っていると、それが「情報環境」を形成し、意図せずしてegoに影響を及ぼすことがあり得る(安野2006)。
- 15) たとえば、リフレッシュのための一時保育制度を整え、親以外の役割を持つ機会を提供すること(前田2004)などは有効な支援策の1つと言えるだろう。

引用文献

- 荒牧草平, 2019,『教育格差のかくれた背景：親のパーソナルネットワークと学歴志向』勁草書房。
- 荒牧草平, 2020,「子育て志向に対するソーシャルキャピタルの影響：地位達成志向と社会貢献志向に着目して」『日本女子大学紀要(人間社会学部)』30: 1-13。
- Bourdieu, Pierre, 1979, *La Distinction: Critique sociale du Jugement*, Minuit. (=石井洋二郎訳, 1990,『ディスタシオン：社会的判断力批判 I』藤原書店)。
- Granovetter, Mark S., 1973, “The Strength of Weak Ties,” *American Journal of Sociology*, 78: 1360-1380 (=大岡栄

- 美沢, 2006, 「弱い紐帯の強さ」野沢慎司編・監訳『リーディングスネットワーク論: 家族・コミュニティ・社会関係資本』勁草書房: 123-154).
- 広田照幸, 1999, 「日本人のしつけは衰退したか: 『教育する家族』のゆくえ」講談社現代新書.
- 星敦士, 2011, 「育児期のサポートネットワークに対する階層的地位の影響」『人口問題研究』67(1): 38-58.
- , 2012, 「育児期女性のサポート・ネットワークがwell-being に与える影響: NFRJ08 の分析から」『季刊・社会保障研究』48(3): 279-289.
- 稲葉陽二, 2013, 「社会的孤立と社会参加」稲葉陽二・藤原佳典『ソーシャル・キャピタルで解く社会的孤立: 重層的予防策とソーシャルビジネスへの展望』ミネルヴァ書房: 1-16.
- 石田光規, 2006, 「選べる関係、選べない関係: パーソナルネットワーク・アプローチの再考」『社会学論考』27: 21-36.
- 金娟鏡, 2007, 「母親を取り巻く『育児ネットワーク』の機能に関する PAC (Personal Attitude Construct) 分析」『保育学研究』45(2): 47-57.
- 久保桂子, 2001, 「働く母親の個人ネットワークからの子育て支援」『日本家政学会誌』52(2): 135-145.
- 前田尚子, 2004, 「パーソナル・ネットワークの構造がサポートとストレーンに及ぼす効果: 育児期女性の場合」『家族社会学研究』16(1): 21-31.
- , 2008, 「地方都市に住む育児期女性のパーソナル・ネットワーク」『家庭教育研究所紀要』30: 5-13.
- 牧野カッコ, 1982, 「乳幼児をもつ母親の生活と育児不安」『家庭教育研究所紀要』3: 34-56.
- , 1987, 「乳幼児をもつ母親の学習活動への参加と育児不安」『家庭教育研究所紀要』9: 1-13.
- , 1988, 「育児不安」の概念とその影響要因についての再検討」『家庭教育研究所紀要』10: 23-31.
- 松田茂樹, 2001, 「育児ネットワークの構造と母親の Well-Being」『社会学評論』52(1): 33-49.
- , 2008, 『何が育児を支えるか: 中庸なネットワークの強さ』勁草書房.
- 目黒依子, 1988, 「家族と社会的ネットワーク」正岡寛司・望月嵩編『現代家族論』有斐閣: 191-218.
- Merton, Robert K., 1957, *Social Theory and Social Structure: Toward the Codification of Theory and Research*, New York: The Free Press (= 森東吾・森好夫・金沢実・中島竜太郎訳, 1961, 『社会理論と社会構造』みすず書房).
- 落合恵美子, 1989, 「現代家族の育児ネットワーク」『近代家族とフェミニズム』勁草書房: 93-135.
- 佐々木尚之, 2008, 「日本人の子育て観: JGSS-2008 データに見る社会の育児能力に対する評価」『日本版総合社会調査共同研究拠点 研究論文集』7: 35-47.
- 関井友子・斧出節子・松田智子・山根真理, 1991, 「働く母親の性別役割分業観と育児援助ネットワーク」『家族社会学研究』3: 72-84.
- 東京大学大学院教育学研究科附属発達保育実践政策学センター (Cedep)・ベネッセ教育総合研究所, 2018, 『乳幼児の生活と育ちに関する調査 2017-2018』ベネッセ教育総合研究所.
- 渡辺秀樹, 1994, 「現代の親子関係の社会的分析: 育児社会論序説」社会保障研究所『現代家族と社会保障』東京大学出版会: 71-88.
- Wellman, Barry, 1979, "The Community Question: The Intimate Networks of East Yorkers," *American Journal of Sociology*, 84: 1201-1231 (= 2006, 「コミュニティ問題: イースト・ヨーク住民の親密なネットワーク」野沢慎司編・監訳『リーディングスネットワーク論: 家族・コミュニティ・社会関係資本』勁草書房: 159-204).
- and Scot Wortley, 1990, "Different Strokes From Different Folks: Community Ties and Social Support," *American Journal of Sociology*, 96(3): 558-588.
- 安田雪, 2011, 『パーソナルネットワーク: 人のつながりがもたらすもの』新曜社.
- 安野智子, 2006, 『重層的な世論形成過程: メディア・ネットワーク・公共性』東京大学出版会.